



2015.11.1

11月 ちとせだより

幼保連携型認定こども園
神戸YMCAちとせ幼稚園

「自分が座っていて席を譲るのが恥ずかしければ、最初から立っていなさい」、私が中学時代に先生から聞かされた言葉で、妙に納得したことを覚えています。確かに抵抗があるのは、自分が座れずに立っていることではなく、席を譲る時の恥ずかしさや、その勇気の無さだったのかも知れません。恥ずかしく、またその勇気がないのであれば、たとえ席が空いていても最初から座らずに、後から乗ってくる人の為に立っていることを選ぶのも、他者への思いやりのひとつの方法であるかも知れません。そんなことを思い出しながら最近の若者の姿を見ると、電車内で平気で飲み食いする者もいれば、周りのことなど気にせずに大きな声で話している者もいて他者への思いやりどころか、そこに他者がいることさえ無視しているかのようです。

「自己責任」という言葉も普通に使われる言葉となり、お互いに支えあう関係ではなく、「人は人、自分とは関係ない」「困っているのは、その人の責任」という風潮が、現代の常識として思われているようです。また、「お互いさま」という言葉も最近聞かなくなりました。「困った時はお互いさま」と言って、困っている相手に手を差し伸べたり、逆に困った時は「ちょっとお願い」と助けを求めたりすることも普通に出来ていた暮らしは過去のものとなってしまったのでしょうか。

子どもたちにとって幼児期は、人間の素晴らしさを知り、人との関わり方を身につけていく大切な時期です。そのためにも、子どもたちが無条件に愛され、安心して自分の気持ちを表現することが認められることが必要です。そして自分と他者の気持ちを理解し、受け入れていくことが出来るためにも、子ども同士の自由な関わりの中で喜怒哀楽といった様々な気持ちを体験することも大切なことを忘れずにいたいと思います。

最後に、論文「農民芸術概論」で、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」とした宮沢賢治の有名な詩の一部を記します。また、彼のこのような価値観は、彼の母親が何度も繰り返し語りかけた次のような言葉から育まれたとも言われています。

「人というものは、人のために、何かしてあげるために生まれてきたのです」

「雨にもまけず」宮沢賢治（抜粋）

東に病気の子供あれば、行って看病してやり、
西に疲れた母あれば、行ってその稲の束を負い
南に死にそうな人あれば、行ってこわがらなくてもいいといい
北に喧嘩や訴訟があれば、つまらないからやめるといい
日照りの時は涙を流し、寒さの夏はおろおろ歩き、みんなにでくのぼーと呼ばれ
褒められもせず、苦にもされず、そういうものにわたしはなりたい

年主題 『平和』をつくる

<年主題聖句> 「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる。」

(マタイによる福音書5章9節)

11月主題 「ありがとう」

聖句 “ 平和の種が蒔かれ、ぶどうの木は実を結び、大地は収穫をもたらし、天は露をくだす。 ”
(ゼカリア書8章12a)